

## あとがき

最後までお読みくださってありがとうございました。

私が本書で示すことができたのは、教室実践の一つの在り方であり、学級づくりや子どもとの関係づくりを中心に行っています。それはもちろん、アドラー心理学の幅広く豊かな世界のほんの一部にすぎないかもしれませんが。

初めてアドラー心理学にふれた方は、「これなら今までやってきた」と思われる部分も多かったのではないのでしょうか。私も、アドラー心理学の実践を始めた頃、同じように感じました。

また、アドラー心理学をもっと以前から学ばれて本書を読まれた方の中には、

「それってアドラー心理学なの？」

と、疑問を持たれた方もいらっしゃるでしょう。「はじめに」で申し上げたように、本書の内容は試行錯誤しながら確かめてきたことです。アドラーが主張することそのままや、読者のみなさんがご存じの「アドラー心理学」とは異なる部分があるかもしれません。ですからこれは、赤坂流の解釈で行った実践だご理解いただければありがたいです。

そして、これからもアドラー心理学を学んでいくつもりの方に、本書をお読みくださったみなさんからご批評いただけることを切に願っております。

本書を執筆することができたのは、これまで担任として出会った子どもたちのおかげです。

課題をやらずにすぐ「固まって」しまうAさん、教室から飛び出すBさん、友達への暴力を繰り返すBくん、私にナイフを向けたCくん、いろいろな子どもたちに出会いました。どうしようもない現実には、自分を責め、子どもに責任転嫁したくなることもありました。しかし、今思えば、こうした出口の見えない日々があったからこそ、アドラー心理学に出会えたのだと思います。

「このままじゃダメだ、なんとかしたい」という強烈な思いが、現状を打破する知恵を求めるエネルギーとなりました。アドラー心理学を学ぶことで、あきらめてしまいそうになる現実にも光を見出すことができるようになりました。

「子どもは、友達とつながりたいんだ。でも、つながり方がわからないんだ」と思うことで、どうしたら彼らの力になれるかを考えるようになりました。

アドラー心理学を教室に導入しながらも、様々な迷いがありました。どうして叱つちやダメなんだろう、ほめたっていいじゃないか、といった疑問は、いつもつきまといました。特に、自分が子どもに対して感情的になってしまったときは、自己弁護のためか、その疑問はいつそう強くなるのでした。しかし、本当に考えなくてはいけないことは、「ほめる、叱る」といった枝葉末節ではなく、自分の行いが相手を勇気づけているかどうかだと思うようになりました。実践は、実践と自分への問答を繰り返す中で生まれていきました。

最初は、子ども一人ひとりつながりたくてアドラー心理学の実践を始めたのですが、学級全体をつなげることも大変有効だとわかってきました。その代表格が、クラス会議でした。見

よう見まねで始めたクラス会議でしたが、子どもたちの表情がどんどん明るくなり、学級の雰囲気気があたたかくなるのを感じようになりました。

嬉しかったのは、教科の学習ではなかなか活躍できないやんちゃ坊主たちが、大活躍したことです。生活態度が控えめな子どもたちも、クラス会議の司会役や書記役に立候補するような姿が見られ、こちらが戸惑うほどでした。

クラス会議を体験した子どもたちは、学年末に私と別れるときに大変残念がつてくれますが、同時に、こう言ってくれます。「先生、来年もいいクラスをつくるからね」と。自分の課題を認識し、たくましく生活していく子どもたちの姿を、そこに見ることができました。

七〇年以上前に生まれたアドラー心理学が、現代の教室でもしつかりとその力を発揮し、子どもたちを輝かせているという事実には驚くとともに、アドラーや彼の主張を現代までに引き継いでくれた多くの方々に感謝しました。

今は、小学校の現場を去り、教職大学院という新しいフィールドで、小中学校から派遣されてこられる現職教員と、教職を目指す若者の力量向上のお手伝いをさせていただいています。

またそのかたわら、あちこちで拙い話をさせていただきます。今年度はご縁あって、学校の先生方だけでなく、幼稚園、保育園の先生方、学童保育の担当のみなさん、そして、保護者のみなさんにもお話をさせていただく機会を得ました。

そこでも、みなさんが一様に関心を示されるのが勇気づけの話です。それは、多くの方が子ど

もを勇気づけたいと思っっているからではないでしょうか。私の拙い話をお聞きくださり、何かを感じてくださった方々が、ご自分のフィールドで、周囲の方々に元氣と勇氣を伝えてくださいますしたら、望外の喜びです。そして、本書をお読みくださった方が、ご自分の教室で子どもたちに元氣と勇氣を伝えてくださることを切に願っております。

さて、本書を執筆するにあたって、研究室に所属する院生のみなさんをはじめ、たくさんの方々に支えていただきました。

それから、私とほんの森出版の兼弘陽子さんを出会わせてくださった文教大学の会沢信彦先生にお礼を申し上げます。会沢先生のおかげで、この企画が実現しました。本当にありがとうございます。そして、最後にありますが、ほんの森出版の兼弘陽子さんに心から感謝の気持ちを示したいです。兼弘さんの励ましが私にとっては勇氣でした。本当にありがとうございます。

二〇〇九年一月

赤坂 真二